

<全体分析>

試験時間 75分

解答形式

記述、選択、論述、計算問題が出題された。

分量・難易(前年比較)

分量(減少・やや減少・変化なし・**やや増加**・増加)

難易(易化・やや易化・変化なし・**やや難化**・難化)

出題の特徴や昨年との変更点

大問数が5題から4題となった。

論述問題は字数指定の問題のみで総字数が540字と増加し、計算問題は、昨年の4問から8問に増加した。

その他トピックス

100字指定の論述が3問出題された。

<大問分析>

番号	出題形式	出題分野・テーマ	範囲	コメント(設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
[1]	選択 論述 計算	固体地球	地学基礎 地学	固体地球をテーマとして、マントルを構成する物質の化学組成、下部マントルを構成する鉱物の特徴についての論述問題、外核のダイナモに関する現象、地磁気の鉛直分力を求める計算問題、地球の熱源と外核・内核の状態に関する問題について出題された。固体地球全般についての基礎的な理解が必要であった。	標準
[2]	選択 記述 論述	地球の歴史	地学基礎	生物の進化をテーマとして、先カンブリア時代に起こった出来事、地質時代の名称、エディアカラ生物群とバージェス動物群の比較に関する論述、古生代ペルム紀末の大量絶滅の原因、中生代白亜紀末の天体衝突の地質学的証拠に関する論述問題が出題された。	標準
[3]	記述 計算 論述	大気・海洋	地学	風にはたらく力をテーマとして、力の種類、コリオリの力を表す文字式、地衡風と傾度風の相違点に関する論述、地衡流とエクマン吹送流の相違点に関する論述、暖水渦と冷水渦の海面の高さに関する論述問題が出題された。風や海水の運動についての現象や原理を正しく理解しておく必要があった。	やや難
[4]	記述 計算 論述	天文	地学	天体の距離の測定をテーマとして、変光星、超新星、星の明るさと等級に関する計算問題、等級と距離の関係式を導出する問題、分光視差、ハッブル・ルメートルの法則に関して、計算問題を含めて出題された。丁寧に計算を進めていく必要があった。	やや難

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

地学のほぼ全範囲から出題されており、基本的な内容の理解を問うものが多いが、教科書の図や欄外にある説明に関する事柄などの詳細な知識についても出題される。「地学」および「地学基礎」の教科書をよく読み、地学現象とその原理について確実に理解しておく必要がある。
 計算問題は、煩雑な数値計算を要するものが出題されることが多いので、過去問などで練習しておくこと。
 論述問題は、すべての分野に関して頻出である。基本的な地学現象や用語について、設問の主旨に応じた的確に表現できるよう過去問などで練習し、添削指導を受けるなどの対策をしよう。